

「広島県立賀茂高等学校 創立八十周年記念誌」掲載

～特別寄稿文～ 昭和前半激動の四半世紀から

「賀茂高女の生徒・教師としての思い出」

元教諭 高崎（岡原）スマ子

私は、昭和二年四月十三歳で県立賀茂高女の一年生に入学した。在学四年間は郷田村（現在の郷曾）から二里（八キロ）の自転車通学である。約一時間かかった。

現在の広大敷地は、当時二神山といって赤松の鬱蒼たる山林で、人通りも稀であった。二、三人の友と長い山中の登り道を自転車を押し上げ、冬でも汗ダクで、下り道は下見への狭い近道を通った。この下り道で、友人ともども飛ばし過ぎて池に飛び込んで、揃ってずぶ濡れになり風邪を引いたこともあった。

朝八時には必ず校内に入った。御真影泰安庫への再敬礼は忘れることはできない。ヒョロついたのでやり直しに、もう一度直立不動になり敬礼をしたものだった。

私共は一番好きな学科は、国語、歴史、幾何だったように覚えている。眠い年頃なのか困ったことが多かった。

吉津校長先生は福島県の方で、先生には、お修身をきいた。将来日本女性は貞淑なる女性になれと説かれ良妻賢母を主張された。全国各地方から来られた先生方が多く、各地方のお言葉の授業を興味深く聞いた。思春期は好奇心も強く真面目にお教えを頂いた。最高点七十七点以上は絶対につけられなかった点のからい歴史の吉川先生も、先年お亡くなりになった。

この時の同級生は一番懐かしく、今でも折節クラス会もあり、西条の街角でバツタリ二、三人会えば、そこらのレストランにより昔に帰って、七十歳の年はすっかり忘れて大騒ぎをしても恥しくも何とも思わないのは不思議である。

賀茂高女も四年生になると、補習授業も延長などあって遅くなり、二神山に入る頃は日はとうに沈み山特有の霧が立籠め、山道は真っ暗に見える。自転車を押し泣きたい思いでぐずぐずしていると、そんな時山の入り口のどこかのおじさんが、さっとみつけて下さって家から出て来られて、「まあ待ちんさい、男の子ならじゃが、あんたみたいな娘の子が一人で山道はあぶない。わしが送って行って上げるけんの。」と言われて、提燈に火をつけて狐も狸もいると言われていた鬱蒼と茂った二神山を、郷田の私の家まで一里（四キロ）ばかりの真っ暗な道を連れて来て下さった。このおじさんは私を送り届けるとまた歩いて同じ山道を、今度は一人で帰らなければならないのである。

私は後で父母に目から火が出る程叱られた。電話はない時代の事である。青春

時代は自分のことに無関心なことが多かった。

翌朝、父は母にお萩を作らせ、おじさんの所へお礼に行かされたことを覚えている。このように他人の子供にでも乙女心を思いやってやさしく面倒を見て下さったおじさんたちは、もうとうに亡くなられた。よい時代の人の心の温かさに胸が熱くなる。昭和の初めの頃の話である。

私は自転車のハンドルの上で、文学全集等載っけて読む名人であったが、道中行き会う人も稀な頃の話で、夢中で読んで作中人物になっているうちに校門に着き、帰途も同様で、私の通学四年間は読書時間でもあった。

私は恩師国文の平岡かね子先生のご指導を頂いて広島女専国文科に入学した。先生は今日九十五歳でご健在で達筆のお賀状を拝して涙を覚える。

三原の女子師範に行かれ初等教育のよき指導者となられた方も数名ある。また補習科に入って、今日の花嫁学校に当たるような諸芸を修業されられた方も多くあった。後日この地方の婦人会のよき指導者となられお世話をせられたことであろう。

私の最も充実した青春時代は、華やかなものから次第に軍国主義に移りつつあり、ほろ苦いものと混沌として遂に戦争に突入していった時代が続くのである。

昭和二十年四月十八日は、呉市女に勤務していた私が、日毎に激しくなる空襲に追われるように、母校賀茂高女に転勤し、温かく迎えて頂いた日である。

かつてこの講堂で、私は十七歳で卒業証書を受けて、将来への言い知れぬ不安と恍惚を覚えた。が、今私は筒袖にモンペ姿で再びこの壇上に立った。十四年ぶりに母校に帰ってきたのだ。

恩師の堀井先生と森山先生が手を延ばして迎えて下さったのは感無量であった。親子の対面のようにであった。

しかし、私は間もなく既に学徒動員令で広海軍空廠に動員されている四年生の、附添職員として交代して、再び空襲下の広に出向しなければならなかった。

この賀茂高女勤労報国隊としての、工場での飛行機部品を作る活動状態は、当時の彼女らによって書かれているだろうと思い省略することにする。

私達は、既に昼夜を分たぬ空襲に、防空頭巾をかぶり防空服装上下のモンペ姿で、もう着たまま穿いたままで夜寝るときもそのままだった。夜間の空襲警報の度ごとに宿舎から山に待避しなければならなかった。今日の生命も保証できない毎日だった。

寝る暇もなく空襲警報にたたき起されるのに疲れたある少女が、「もう私は死んでもいい、逃げません。」というのには困った。最後の一人までも退避させるのが私達の責任ではないか。無理に引張って退避したこともある。泣きたくなる。

手を引張って逃げながら、「先生、どこへ行ったら逃げんですむかしら。」と問われて、「アメリカへ逃げたらいいでしょう」と、思わず答えて後悔したが、後日その彼女は本当に縁あってハワイへ養女に行っているそうである。今日もし帰国して五十七歳の彼女に出会ったら、おそらく「空襲は逃げられますけれど、逃げられないものがありますね」と言うかも知れない。

私は七月に入って他の女子の先生と交代して帰校した。それからの事は、東広島原爆体験記集に寄せた原稿をもって代ささせて頂くことにする。

昭和二十年八月六日、原爆投下された当時の賀茂高女の状態は次のようであった。

四年生は、広海軍空廠に学徒動労働員されて、もう既に学校にはいなかった。

三年生は、学校は一部を残して、広島陸軍被服廠の学校工場となっていたので、彼女らはミシン工として白鉢巻も凛々しく軍服縫製のミシンを、学校中唸るような騒音の中に踏んでいた。

二年生は、八月に入ってからだったと思う四キロ離れた 賀茂郡郷田村東子（現在の東広島市西条町東子）の呉海軍工廠火工部疎開工場に勤労働員されて、自宅から工場に通勤しはじめていた。

一年生だけは、わずかに残された校舎の一隅で、まがりなりにも授業を続けていた。

一年生の授業といっても、既に出征中の男教師はおられず、広空廠に宿泊して生徒の附添教師として出向されている方もあり、留守番役のわずかな人数の教師が、各自の専門教科の都合で、片寄った授業を行っていた。私も一年生の授業をしながらも、教科の都合上交代して二年生の働く東子工場にも出向いた。

運命の日、八月六日、原爆投下の一瞬は、教科上誰かと交代させられて、私は東子工場に出向いていたときだった。

若い将校の短い朝礼のことばが終ろうとした瞬間、八時十五分、西方にピカッと閃光を感じた。しばらくしてドーンと大音響が伝わり、驚いて見上げた広島上空と思われる空に、果てしなく上へ上へと、入道雲のような大きな雪のかたまりが昇って行くのを見た。誰かが、「広島のカスタックに爆弾が落ちてガス爆発したんだ。」と大声で叫んだ。

みんな同じように大変だという面持で見まもっていた。一たん上がった、そのキノコ状の雲は一日中消えなかったような気がする。まるで悪魔が立って威嚇するかに見えて無気味だった。

この東子工場は、爆弾を作る火工部の工場で、最近に疎開工場として呉から移されて来たらしい。これからやっとう工場の建物建築がはじまろうとしていた。

彼女らの仕事は、呉から輸送されて山積みされた古い建築用材の中から、一本

ずつ引き抜いてきては、それに数人集まって釘を抜く作業であった。釘を再生して使うということらしい。釘抜きの用具が少ないので、小石でたたいて抜くのためから容易ではない。抜けたら小石の上へのせ、別の小石でたたいて真っ直ぐにのぼした。カチカチコツコツと、朝から終る時間まで、「もう何本のぼしたのよ。」と笑い声を上げながら、箱の中に直立不動の釘を並べていった。

彼女らは、真夏の炎天下で、麦藁帽をうつ向けて汗をタラタラと草の上に落した。

まだ、西の空に見えているキノコ雲の下で、いつの歴史にも見なかった残酷な地獄絵図が展開されているのを誰も知らなかった。

私は翌日、一年生の授業に学校に帰った。ここで私は、多くの広島の情報を書いた。

西条駅に下車する人たち — 裸同然の焼けただれた被災者の群、通過する車窓にも異様な裸身の焦げた姿 — 。広島市は火の海だということだった。その情報はどれをきいても、見たことも聞いたこともない驚天動地のものであった。

八月六日のピカドンは、日本国民、広島市民のみならず、やがて広島市に入っていく私達広島救援隊としての、かつての生徒達にとっても、碑のように深く彫りつけられた運命の日であった。

この日から私達は、世をおわる日まで、怖ろしい悪魔のふり上げた鋭い爪のふり下ろされるのを、いつも怯えながら待たなければならないことになるのである。

八月六日の早朝、学校工場のミシン工であった三年生の上田茂子さんは、広島市大手町の叔母さんが危篤だというので呼び寄せられ、西条駅から広島に出かけたきり帰らなかった。

それから、彼女の欠席が続き、両親、近親者の方々が広島に出かけて探しているという知らせがあり、学校も彼女の行方を交代で探しに広島市に出かけることになった。

八月十五日、校長から命ぜられて、彼女の親しかった生徒と同伴の教師と私も、壊滅し、焼土と化した広島市に、はじめて足を入れた。遺体が、むごたらしい有様で並んで倒れている。言語に絶する焼跡を、本川や学校収容所、大手町辺を歩いて、日赤病院に、一縷の望みを抱いて、亡き人や負傷者の顔を探して歩いたが、茂子さんは発見できなかった。私たちは絶望の中に帰校した。

上田茂子さんは、その後も沢山の人が探されたが遂に帰らぬ人となったのである。

賀茂高女生徒としては、予期せぬ唯一人の最初の原爆犠牲者となったのである。悲しい事であった。

吉田校長の子息も、広島一中に早朝出かけたきり夕方になっても帰らなかつ

た。後日似島収容所で発見されて、動けないので負うて連れかえり、長く病床で苦しんだ。

西条町周辺には、広島市へ通学通勤者も多く、六日早朝出かけたきり帰らない人は数知れずあり、近親者による広島市の焼跡の収容所さがしも、疲労困憊のありさまであった。そうした事が、後に彼らの体にどんな影響をもたらすかは、神ならぬものの知る由もなかった。たまたま幸運に逃れ帰った人も寝ついたきりで頭が上がらなかった。

八月十五日は、日本国民としては忘れられない終戦の日であった。取り返しのつかない悲嘆は永久に忘れられないであろう。四十年経っても胸をつき上げてくるものがある。

八月十七日、いよいよ私共の広島救援隊として出動の日である。まず校長のもとに、十五日県学事課から至急広島救護出動の指示があったので、終戦と同時に、動員を解かれて帰宅したであろう高学年の三、四年生に、口から口の緊急連絡網で、通達できた範囲内で父兄承諾書を取って、広島教護隊が編成された。

十七日、早朝から 桧山博先生が団長となり、十一名の教師は、当時の列車は復員で満員の状態なので、西条駅から時間差をつけて、個々の教師が残って引率して乗車し、広島駅に着いた。

私は女学生と、麦わら帽にリュック姿で、七十年草木も生えず、と言われた、見渡す限り瓦礫の焼跡を、カッと照らしつける真夏の太陽のもとを、黙々と徒歩で長い列をなして歩いて行った。途中に立退き先の記された木札の立てられているのを見た。被爆者の誰かを待つ心の切なさが見えてあわれであった。

現在の日本勧業銀行ではないかと思う石造の建物、その時は東警察署でそこへ到着した。私達は数時間待たされたような気がする。誰も彼も動員中の疲れでリュックに縋って寝た。

やがて、本川小学校収容所、大河小学校収容所、段原山崎第一高等小学校収容所、白島収容所等へ配属が定まり配分された人数の生徒を連れて、一人二人女教師が付き添って再び焼跡を、命ぜられたそれぞれの収容所に向って歩いた。宿泊して約一週間というので女教師の引率となった。私の場合は、配分された生徒を連れて、本川小学校収容所へ向った。

かつて私も学生時代に四年間住んだ懐かしい城下町だったが、今見れば、国破れて山河ありの感一入で、焼けた電車の残骸・むくろのように残った原爆ドームを見上げながら、人間は、営々と営み作ったり、あつけなく壊してしまったり、それに引きかえ 広島は川々はどうだろう。あの日は、焼け焦げながら逃げ飛び込んだ人々や死体で溢れたというのに、それらのものをもう過去に押し流して川面は静かに光って流れていた。この時引率した女学生も現在五十六、七歳になっているが、この時うけたショック、人間の空しさ、そして悠久なる自然が、何

らかの人生観のもととなり生涯残っていることと思う。

赤い瓦礫の下には、亡き人々が無数につぶされているようで、異臭と無数の蠅である。相生橋の橋上で、馬の形にうず高い白い蛆が、とめどもなく盛り上がるのを見て顔を背けたが無慙そのものであった。

爆心地に近い本川小学校収容所は、川べりの鉄筋の建物で、校舎のコンクリートの波形の床の上には、百人くらいかとも思われる負傷者が並べられていた。一人一人が焼けただれ、ほとんど腐ったいたましい姿は、目をそむけたい惨たらしさで、赤チンを全身塗られて目を見開いているようで動かない。目のまわりも口のまわりも傷口も、盛り上った蛆の行列で、おびただしい蠅である。異臭である。ああこれでも人間といえるか、万物の霊長なのか、ひどい！と、私は悲しみと憤りに体がふるえ涙がふき出て止まらなかった。

畏敬の象徴であった御真影奉安庫にも負傷者が数人寝かされていた。既成のモラルも何も次から次へと壊されていったたまらない空しさであった。

老医師が一人私たちを待っていた。

米俵とバケツの前に人がいて、彼は、「八勺のおむすびを作って一個ずつ手に渡してくれるように。」と告げると直にいなくなった。

老医師は、早速生徒の半分を看護の方に連れていった。彼女らは赤チンを塗って上げたり体をふいて上げたり、身の廻りの世話をかいがいしくして上げていた。

私はすぐに夕食の仕度にかかった。生徒たちは、焼跡から、高く噴水のようにふき出ている水をバケツに受けて米を洗ったが、立った足の下にも死体がいくつも見えかくれて埋まって、瓦礫といっても腐敗した異臭とおびただし蠅群に、彼女らは音をあげながら働いていた。

大きな鉄釜が、運動場に石塊を積んだ即製のかまどの土に載っていた。洗った米を入れたが燃やす薪らしいものが見当たらない。

生徒を連れて木片を探しながら焼跡をまわっていると、まさに奇蹟のように、空地に薪が山が積まれて、〇〇配給所という立札が見えた。人影一つない瓦礫の中にである。「この辺一帯は、本川小学校収容所に入れられている方たちの住宅があったのかも知れないね、頂こう。」と私たちは威勢よく両手に一把ずつぶら下げて引き上げた。

火はドンドン燃えた。急げ急げはよかったが大こげを作ってしまった。上は粥状で底はベリベリといっている。失敗だった。全部火をかき出して粥状の表面を棒で突っついて穴をあけて水分の引くのを待った。どうやらふっくらとしたところで八勺のおむすびである。柔かい少女の手は熱さに真っ赤になった。夢中になって作った。大へんな数である。バケツに入れて彼女らは一個ずつ手に載せてまわることにした。

蠅のたかった手にのせて上げるとまた蠅がたかって胡麻塩むすびになる。「早く食べて下さいね。」といっても、返事もなく、生死の分らない状態の人が多くと報告を聞いた。次の時、前にあげたおむすびが、真っ黒のまま手に載っかっているという。

生徒たちは、歯を吸いしぼるような悲痛をこらえて顔を伏せながら配給して歩いた。

肉親縁者であろう。枕もとにすわって胡瓜の熟れたので、焼けただれた裸身をその果汁で撫でまわしている女の人もあった。

七輪を持参して炭火でお粥を作り、スプーンで口に運んでいる母親らしい人もあった。

私は生徒たちにただ一人様たえられて目をあけている人には、とくに気をつけてどんな事でも言われるように手伝ってお上げなさい。等と頼んだ。

夕方になると警官らしい人が生徒に手伝わせて、亡くなった人を砂場に運んでは油を注ぎ燃した。人の最後に燃える火の弱々しさよ！ このようにして尊かるべき人間に終末を遂げさせた戦争を生徒と共に心から憎んだ。将来、抵抗する為に牢に入れられるとも反戦運動の妻・母に絶対にならねばならぬなどと心から語り合った。

戦後十七、八年も経った頃、町の回覧板で原爆被爆者健康手帳の交付があることを知った。

それ以来私は、賀茂高等女学校広島救援隊のメンバーとして出動した三、四年生の彼女らの手帳申請の証明を続けてきた。

あの時の少女の中には、もう白血病で逝った人・ガンで逝った人もあり、引率教師の中にもある。血便になやまされ、脱毛し、丸坊主になっていつも頭巾をかむっていた人もある。五十六、七歳にもなればいろいろと思いがけない病気も出てくる。めいめいが少女の日かいま見た地獄絵図、あの実態にふれた哀しさを、人間が、その惨事を戦争という名目で行ったという事に、言い知れぬ憤りを抱いたことを、八月六日が廻りくる度に思い出し、火のようにふき上げるものを感じる。決して決して忘れてはならないことである。

原爆症の怖ろしさを私たちは知った。私は救護に従事していながらも、現在まだ被爆者健康手帳を受けていない彼女たちの為に、一人の証明者として、いつも健在で待っていたい。そうは思いながらも、ここ十年来常習性頭痛になやまされて、人中に出るのがつらいので困っている。

昭和二十七年の原爆記念日に除幕された、平和公園の慰霊碑の碑文は横書きに、「安らかに眠って下さい。過ちは繰返しませぬから」と書かれている。これは故 雑賀 忠義 広島大学英文学教授の執筆されたものである。

八月六日は、昔話で終わったのではない。私たち一人一人が、核兵器廃絶、平和

の為には何かをしなければならないことを、強く人間の義務として決意しなければならないと思うのである。

終戦後暫くしてからだったと思う。進駐軍のヘーガー学務課長が、学校視察に来るといふ知らせが入った。

次の日から学校を挙げて、教室の展示物、図書館、物置の総点検にかかり、日本帝国主義、軍事色の懸念され危惧される書類、書物は焼却するより仕方がなかった。

木造の職員室の囲炉裏然とした四角の大火鉢で、先生たちが一々目を通しては燃された。長い間価値があり貴重だった書物や、後日惜しまれたものも灰になった。天井が真っ黒になって煤が降って来た。私たちは無気力になり暗い虚脱感で心の中まで煤け、敗戦を身にしみて知った。しかし、澄んだ青空の下賀茂高等女学校校舎は健在で、田園の中に残り不思議なくらい美しく輝いて見えた。

この戦争で、上田茂子さんを原爆犠牲者として唯一人失わなければならなかったのは悲しい事であったが、他の生徒は全員教室に顔を揃えた。日毎に都会からの焼け出され疎開者達の転入学者がふえ、教室は満員の状態になった。

きれいさっぱりと戦時色を払拭した学校に、ヘーガー学務課長はやってきた。

私は四年生の国語で、「趣味」という題で生徒と話合っていた。軍靴のまま軍服姿でガタガタと五、六人教室に入ってきた。戦争で鍛えられた私たちも、恐ろしさと屈辱で固くなった。

Aさんだったと思う。「私は乗馬が大好きです。毎朝起きると山の方まで飛ばして行くが、こんな気持のいい事はない。」と言った。通訳らしい人が何かささやいている。誰かが、「おそろしいでしょう。落ちたら大怪我になるよ。」というのと、「小さい時から馴れているので、落ちたことはまだ一ぺんもない。」とうとう乗馬のやりとりになった。

彼ら一行が隣の教室に出て行って、ホッとした私も生徒もあまり笑えなかった。こんないやな参観者は後にも先にもなかった。

学制改革で、賀茂高等学校となり、再編成で西条高等学校となり、再々編成で再び高等学校となり、慌しい数年間であった。国道二号線を自転車で、行ったり来たりして授業をした記憶がある。

西条高校時代の農業五科の生徒と普通科家庭科の生徒の大世帯の日々は、私には困惑と懐かしい思い出が一杯ある。

戦争で父を失い、家族を失い、家を失った生々しい傷手を受けた彼らと、文芸誌「尖塔」をつくった。

ひそやけき／幾月か／きづききし／われらが塔のあり／文化の哀傷／ここにこもりて／白銀の光を放たん

と、その意を説明して募集した。小説を書いていたのは土肥浩右さん、加藤博秋さん、柴田豊秋さん、山田富夫さん等から、次々と投稿されるようになり、短歌では、広島歌壇で数え切れないくらい現在活躍している人たちがその中にいた。

私は西条高校の普通科七十名のクラスを担当したことがあった。その中に、授業中よく発言するので、英語の先生に「バケツ蟹」とニックネームをつけられた英語と絵の得意なBさんがいた。父母を広島で失い、叔父さんの世話になっていたが、卒業後、ハワイのおじの所へ行くというので、「ハイスクールに先ず入るんだ。それからハワイ大学、と僕はやるからね」と挨拶に来た。それから十数年も経ただろうか。お婆さんの病氣見舞に帰国したから、と賀茂高校に私をたずねてくれた。快男児は見事な成長を遂げていた。

「先生僕はハイスクールはいつもトップだったよ。先生はうそだろうと思うだろうが本当の本当なんだ。そしてハワイ大学も優秀な成績で、僕の性に合っているのかと思うように何でもやれて、先生、僕は今では日本語の文法と商業デザインの講師なんだ。結婚もして男の子も一人いる。」と母親に誇って話すように語るBさんの言葉は、胸を熱くするものがあつた。そして、「お願い、一時間英語の授業をさせてくれないか」と頼まれて、当時の松本先生のクラスで、明るいユニークな授業をして、先輩のBさんも後輩の生徒も大喜びに喜んだ。彼は言葉通りやったのである。

今一人、父は戦死だったと思う。お母さんと、Cさんの事も、今では昔話である。西条高校二年生くらいであつただろうか、文芸班の班長もしていた。よく世話をした。

月曜日の授業が始まって間もなく、「先生、早退させてください。雨が落ちて来そうだから、昨日母とやっとな水田を全部刈って干してあるんです。あれが濡れると泥んこの中で動きがとれんです。ハゼにしてかけてしまわないと。」と言つた彼も、よい家庭を作り保育園長さんである。

先日、Cさんのお母さんと眼科の待合室でバッタリ会ったら、「孫も長男は京大にゆきまして、弟は附属高校の一年生で僕も兄ちゃんの大学に入ると言っております。」と微笑んで語られた。終戦後の困難時代を生きた生徒には、自分には報われなかつた不満であつただろうが、なかなか人生は味があるなと思う。平等でもある。

再編成後の西条高校の生徒は、誰でも親しみお世話になつた、図書館のD先生をご存知だと思う。私は同じ女性だし同い年でもあつたので、特に親しかつた。が、長男のEさんが大学受験一週間前に、長い病院生活の後癌で亡くなつた。母を失い妹二人と祖母を残された彼は、間もなくたよりの祖母を失つた。

父の戦死後、母をたよりに成長した彼は、決意して妹二人を連れて京都に移り住み、同志社大学英文学科に学びつつも、妹二人の学校、結婚と面倒を見て、親代りの役目を立派に果たした。Eさんのお母さんは教育ママともいべき教育熱心な方だったが、現身ならざるも、彼には母は生きて絶えず、励まし助けていたと思わざるを得ない。お母さん安らかに眠って下さい！と、私はいつも思う。

Eさんは同志社大学の卒業を前にして総長室に呼ばれた。「毎年、本学から一人、創設者の新島 譲 先生の出身校のアーモスト大学に留学生を送ることにしているが、今、教授会で、今年は英文学科から君を送ることに決定したがどうだね。」と聞かれた時の彼の気持は想像に余りあるものがある。

私は、その由を電話で知らされて、彼の喜びもさることながら、亡きお母さんの喜びを思うと自分の事のように涙がこぼれた。現在、同志社高校のユニークな先生である。

西条に墓参に帰省の時、いつもこの郷田の不便な田舎までたずねて来て、外国を飛び廻ってきた時の話、最近次々と書いては出している本の話、献本を頂いた。またスポーツの話。しかも野球部長としての活躍ぶり、駿台予備校で受験生のお尻をたたいている話、アルバイトの話、その軽快な若さに溢れた内容たっぷりの話ぶりに釣られて、私も老いを忘れて青春にかえる。家族にはお父さん譲りの明るい子供さん三人、伸びゆく若木で末頼しい限りである。

じみで、真面目で、コツコツと努力して伸び、よき仕事をなし、あたたかい家庭を作られた賀茂高校卒業生は数限りなくあるに違いない。私には想像できる。

最後に『被爆四十年賀茂台地の声』が近く発刊されるが、被爆者証言グループの一人として、昨年来私も少しお手伝いしたが、その時私はグループの方から、被爆者の証昔の聞き取りに、賀茂高校生の協力を依頼できないものだろうか、と頼まれて、久しぶりに母校を訪れた。

だが、お忙しい中を快く斎尾先生、築地先生がお会い下さり、ご助力を約束して下さいました。

その結果、夏休みに多くの先生方がご自身の車で、生徒を連れて、被爆者二百名を一軒ずつたずね、録音テープやメモを記録して頂いた事を今朝の朝日新聞紙上で見て嬉しくて胸が熱くなった。

心から、賀茂高校の先生・生徒の皆さんに御礼を申し上げます。

青空のもと、この賀茂台地の広い土壌の温かみの中に生まれ成長して、八十周年を迎えたわが母校に、心からお祝いを申し上げ、将来ますます人間性溢る賀茂高校生気質を醸成し発展して行かれんことを祈っています。